

## 越境するアジア映画の可能性とそのルーツとしてのマレーシア ——シンポジウム「アジア的ホラー・コメディの可能性」——

篠崎香織

2011年9月18日にJR博多シティ大会議室でマレーシア映画に関するシンポジウム「アジア的ホラー・コメディの可能性」が行われた。このシンポジウムは、同16日から25日までTジョイ博多で開催されたアジアフォーカス・福岡国際映画祭のプログラムの一部として、「アジア映画文化フォーラム」第2部で、マレーシア映画文化研究会（JAMS 連携研究会）と福岡国際映画祭の主催で開催された。

シンポジウムはパネルディスカッションの形式をとり、山本博之会員（京都大学）が話題提供を務め、『ピノイ・サンデー』のホー・ウィディン（Ho Wi Ding／何蔚庭）監督と、『歓待』の深田晃司監督に映画制作にまつわる話を聞いた。『ピノイ・サンデー』（Pinoy Sunday／台北星期天）（2009年／台湾・日本・フィリピン・フランス／85分）は、台北の工場で単純労働者として働くフィリピン人が、寮の屋上にソファを構えゆったりと腰掛けて星空を見ながらビールを飲むという夢をかなえるべく、台北の街中を大きなソファを抱えて右往左往するというコメディだ。『歓待』（2010年／日本／96分）は、東京の下町で小さな印刷所を営む小林家に外部から「客」がどんどん流入し、主客が混合するなかで、観客を笑いと困惑・恐怖との間で揺さぶる作品である。2010年東京国際映画祭日本映画ある視点部門で作品賞を受賞し、日本の主要都市で上映されているほか、世界の主要な国際映画祭にも招待され、国内外で高い評価を得ている。九州での上映は今回が初となった。

いずれの映画も一見マレーシアとは関係がなさそうだが、実はいずれもマレーシア映画の系

譜を引いている。ホー監督は台湾を拠点に活動しているが、ジョホール州ムアルの出身である。ニューヨーク大学芸術学部を卒業後、シンガポールでの勤務を経て台湾に移り、広告やドキュメンタリーの制作から映画の世界に入った。短編映画『Respire（呼吸）』（2005年）と『Summer Afternoon（夏午）』（2008年）は各地の国際映画祭で高い評価を受けており、初の長編作品となった『ピノイ・サンデー』も台湾金馬賞最優秀新人監督賞や台北国際映画祭審査員特別賞を受賞した。ツァイ・ミンリャン監督など台湾を拠点に文芸の場で活躍するマレーシア人は多いが、ホー監督もそうした系譜に位置付けうる。

『歓待』は短編映画として企画されていたが、杉野希妃氏が長編映画にするよう提案し、プロデュースした作品である。女優である杉野氏がプロデュースも手掛けるようになったきっかけは、ヤスミン・アフマド監督との出会いであった。ヤスミン監督の作品と人間性に大きな感銘を受けた杉野氏は、日本を舞台に『ワスレナグサ』を企画していたヤスミン監督に直談判して同作品をプロデュースすることとなった。ヤスミン監督の急逝により『ワスレナグサ』は実現していないが、この出会いが縁となり杉野氏はマレーシアの映画人の作品に俳優・プロデューサーとして関わり始め、さらにアジアやヨーロッパでも協働の場を広げつつある。『歓待』を貫くテーマに、外来者はいかにして在地の社会で「私はここにいてよい」と思えるようになり、また在地の社会はいかにして外来者を「ここにいてよい」と思えるようになるのかという問いがある。これはまさにマレーシアの人たちが抱

えてきた問いであり、マレーシアの映画人と協働してきた杉野氏を通じて『歓待』に流し込まれたと言える。

山本会員は、話題を提供するうえで、人の移動が著しい今日アジアでは混成的な状況が進展しており、それを反映するように『タイガー・ファクトリー』(ウー・ミンジン監督/2009年/マレーシア・日本)や『ビクトリア公園の日曜の朝』(ロラ・アマリア監督/2010年/インドネシア)、『ソウルのバングラデッシュ人』(シン・ドンイル監督/2009年/韓国)など外国人労働者を描いた作品も増え、『ピノイ・サンデー』や『歓待』もこの流れに位置付けうると指摘した。そのうえでこれらの映画は、コメディ映画が観方によって笑いにもホラーにもなりうるように、受け入れる側として観るか受け入れられる側として観るかによっても作品に対する印象が変わり、さらには観客の多くが抱いているであろう「ホストで主流派の自分」という自己認識を見直しうる契機を含んでいるのではと投げかけた。

これに対して深田監督は、外国人の排除を叫ぶ右翼のデモが正式な手続き基づくがゆえに合法的なものとして警察に護衛される光景を新大久保で目にしたことがきっかけとなり、外来者が生きにくい日本を意識し、混成さを排除しない社会を映画の中で作り上げたいという思いをもち、それが『歓待』につながったと述べた。

外国人労働者を取り上げた作品には、「ゲストで非主流派の人たち」が置かれている困難さを告発するようなものも多い。これに対して『ピノイ・サンデー』の出発点は、全く違うところにあった。ホー監督は、ロマン・ポランスキー監督の『タンズと二人の男』に影響を受けて物を運ぶ人を撮りたいと思い、台北で物を運ぶ手

段がない人たちといえば学生か外国人労働者だが、後者の方が文化の違いも描けて面白いだろうと考え、それから台北のフィリピン人コミュニティについてリサーチを始めたという。フィリピン人の俳優とは英語でやり取りし意思疎通は全く問題がなかったが、タガログ語はわからず、そのなかでフィリピン人が主役でセリフの90%がタガログ語の「台湾映画」を撮ったことは台湾の観客におおいに驚かれたそうだ。また「自分の知らない台北を見た」との感想も多かったと明かした。ホー監督は、マレーシアで生まれ育った自分にとっては分からない言語がある状況は当たり前なので、台湾の観客の反応に自分も驚いたと述べ、外来者であるからこそ撮れる光景があると自らの外来者性を肯定的に押し出した。また、作り手と受け手とで映画の観方が違うことは多々あり、視点を切り替える契機を提供しうるメディアという点で映画には大きな力があると述べた。

ある地域の社会について発言する時には、その社会の当事者性が問われる状況がどの社会にも抜きがたく存在してきたように思う。これに対して昨今では、外来者性を自認する主体が、ある社会で共有されている文脈とは全く異なる文脈からその社会のある光景を切り取って映像化し、世界に向けて発信する状況がある。舞台となった社会の人たちがそれを受け入れようと受け入れまいと、ひとたびその映画について議論すれば、それは自分たちの社会のあり方を議論することにつながり、それが社会の再編の契機となるかもしれない。今回のシンポジウムでは、越境し、外来者性を肯定的に押し出し、混成的な状況をとらえようとするアジアの映画人による映画が、社会再編の契機さえはらんでいるように感じられた。